

大学発アーバンイノベーション神戸 研究成果報告書

令和4年5月31日

区分	一般助成型	
研究分野	神戸の映画館文化の振興に向けた参加型デジタル・アーカイブ構築	
研究期間	令和2年8月31日～令和4年3月31日	
研究代表者	氏名	上田 学
	大学等	学校法人神戸学院 神戸学院大学
交付決定額(研究期間全体)	1,405,000 円	

○研究成果の概要（400字以内）

本研究は、(a) 大学生・市民参加のワークショップ、(b) 研究者による文献調査、の二つの方法を通じて、デジタル・アーカイブを構築し、潜在的な映画館観客の需要喚起に寄与するものである。(a)に関して、元町映画館および神戸フィルムオフィスの協力のもとワークショップを開催し、さらに神戸映画資料館で神戸の映画関係者を招聘して公開研究会を実施した。(b)に関して、神戸映画資料館が所蔵する大正期・昭和初期の映画館プログラム705点（玉岡忠大コレクション、中村茂隆コレクション、唐津光子コレクション）からメタデータを採録し、あわせてデジタル静止画2411枚を撮影した。さらに兵庫県内の映画館発行分のプログラム486点を抽出し、そのうち資料調査により発行年を特定できた208点のレコードを「神戸市・兵庫県映画館資料データベース」に収録した。

○研究成果の学術的意義や社会的意義（200字以内）

神戸映画資料館が所蔵する映画館プログラムをデジタル化し、神戸の映画館に関する歴史研究を進め、ワークショップによる若年層の映画文化への意識を高めるとともに、神戸の映画館文化を振興させる新たな映画観客の掘り起こしに結びつけるための基盤を形成することになったと意義づけられる。

1. 研究開始当初の背景

神戸の新開地は、かつて一街区としては東京の浅草・新宿、大阪の千日前と並ぶ、日本最大規模の映画館街を形成していた（板倉編、2019）。しかし現在の新開地は、単館系のパルシネマしんこうえんとCinema KOBE、及び複合文化施設の神戸アートビレッジセンター（2021年度末で映像事業終了）のわずか3館まで映画館が減少しており、2018年度に神戸映像アーカイブ実行委員会が実施した前者2館の館主への聞き取りによれば、とりわけ若年層の観客減少が著しい。さらに今年度は、新型コロナウイルス感染拡大にともなう休業要請が実施され、新開地を含む神戸の映画館は極めて厳しい状況に追い込まれている。

本研究は、このような新開地を代表とする神戸エリアの映画館に関するデジタル・アーカイブ構築を、大学生・市民に向けた参加型ワークショップと関連づけて実施し、若年層を中心とした映画観客を、新たな観客層として映画館に呼び込み、新型コロナウイルス感染拡大により著しい打撃を受けた神戸の映画館文化復興の一助となることを目的とした。

本研究が連携するNPO法人プラネット映画保存ネットワーク（理事長・安井喜雄、専務理事・田中範子）は、新長田において単館系の神戸映画資料館を運営しており、研究代表者・分担者（神戸大学准教授・板倉史明）が、NPO発足時より正会員として参加するなどの信頼関係を築いてきた。2017年よりNPO前身の神戸映像アーカイブ実行委員会が、「市民参加型アーカイブ」の理念にもとづく「アクテ

イブ・アーカイブ・プロジェクト 誰でもアーキビスト」を実施してきた。本研究は、このような NPO の理念と実績を継承しつつ、研究者のデジタル・ヒューマニティーズの知見も織り交ぜ、大規模に公開可能なデジタル・アーカイブを構築し、神戸の映画館への大学生・市民の関心を惹起することを意図した。

2. 研究の目的

かつて新開地が日本最大規模の映画館街を形成するなど、神戸エリアで花開いた映画館文化が、どのように形成され、また縮小していったのかについての通史研究は、これまで十分に存在しなかった。新開地や三宮こそ特定の時代の先行研究は存在するものの（神戸 100 年映画祭実行委員会ほか編、1998 等）、それ以外の神戸エリアの映画館の歴史については、十分な先行研究が存在しない。本研究の具体的な目的は、大学生・市民が参加するワークショップと、研究者による文献調査を組み合わせ、その成果からデジタル・アーカイブを構築し、神戸エリアの映画館に関する通史研究を実施することにある。その過程で、大学生・市民に向けた、街歩きの参加型ワークショップを開催し、新たな映画館観客層の掘り起こしによる神戸の映画館文化復興への寄与を図った。

3. 研究の方法

本研究は、(a) 大学生・市民による参加型ワークショップ、(b) 研究者による文献調査、の二つの方法により、神戸エリアの映画館に関する通史的なデジタル・アーカイブを構築し、潜在的な映画館観客の需要喚起に寄与するものである。

(a) に関しては、すでに連携の NPO が実績・経験を蓄積しており、その協力を得て方法を踏襲した。具体的には、かつて映画館が集まっていた神戸エリアの街区を、大学生とともに街歩きし、現況を調査するとともに、かつての映画館文化の隆盛の記憶を共有した。さらに最終年度の公開研究会などを通じて、広く社会に研究成果を還元した。これらのワークショップや公開研究会を通じて、現住市民から映画館に関する情報を収集し、デジタル・アーカイブに収録した。なおワークショップや公開研究会の実施に際しては新型コロナウイルス感染防止に十分に努め、感染拡大局面に至った場合は適宜、実施延期等の措置を講じた。

(b) に関しては、神戸映画資料館所蔵の映画館プログラム、および大学所蔵の『映画年鑑』等の研究資源を活用し、神戸エリアの映画館に関する通史研究と、デジタル・アーカイブ構築を実施した。アーカイブ構築に際しては、データ入力等に関して研究者（神戸映画資料館客員研究員・田中晋平）の協力を得た。研究分担者も、神戸の映画史に関する編著書の業績をもとに（引用文献参照）、アーカイブ構築に向けて情報を提供した。

4. 研究成果

【雑誌論文】

・ 上田学、「山本明コレクションにみる全神戸映画サークル協議会の地域性」、『人文学報』、2021 年、116 号、107-119 ページ。

【学会発表】

・ 近藤和都、板倉史明、仁井田千絵、上田学、「受容から考える映画史——近藤和都著『映画館と観客のメディア論』書評会」、日本映像学会映画文献資料研究会（本研究と共催）、2021 年。
・ 上田学、「神戸市・兵庫県映画館資料データベース」、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点オンラインシンポジウム「デジタル時代の映画館プログラム データベース公開と活用の可能性」（本研究と共催）、2022 年。

【図書】

・ 上田学、「「神戸市・兵庫県映画館資料データベース」の設計に関するノート」（19-25 ページ）、近藤和都編、国際日本文化研究センター、『国際日本文化研究センター大衆文化プロジェクト現代チーム報告書 神戸映画資料館所蔵映画館プログラムのデジタル化・カタログ化』、2021 年、291 ページ。

・板倉史明、「甦った世界の映画 日本」「発掘作品紹介 記録映画」(18-19・24 ページ)、神戸映像アーカイブ実行委員会編、神戸映像アーカイブ実行委員会、『甦った世界の映画——ガイドブック 映画保存の歩みと現在』、2020 年、24 ページ。

<引用文献>

板倉史明編『神戸と映画 映画館と観客の記憶』神戸新聞総合出版センター、2019 年

神戸 100 年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会編『神戸とシネマの一世紀』神戸新聞総合出版センター、1998 年

※大学発アーバンイノベーション神戸による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。
そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、神戸市の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。